

## 質的データの分析 —〈物語〉の構成という視点から—

能智正博\*

### Qualitative Data Analysis as a Story Construction

Masahiro Nochi

Graduate School of Education, the University of Tokyo

This article introduces a method of qualitative data analysis, comparing it with a story construction process. Qualitative researchers often aim to understand other persons' experiences from their own viewpoints through interviews or direct observations. The viewpoints take the form of a story or a narrative, which includes some human-like characters that relate to each other and integrates them into a plot as a whole. In some phases of qualitative analysis, these characteristics of the story are discovered or reconstructed based on the persons' accounts or actions. The phases of such research involve reading or interpreting qualitative data as this process focuses on meaning, not on physical characteristics of the data. Thus, the researcher needs to go beyond the denotation of the data and to infer the connotation of the data. The quality of the story constructed in this process depends on the reading or interpretation procedure. To distinguish between good or deep reading and bad or shallow reading, three criteria are presented. The first criterion, "reality", shows the degree to which one feels real or vivid about the story. The second is "novelty", the degree to which one believes that the story adds new information to extant knowledge. Lastly, "relevance" is the degree to which one thinks that the story is significant to one's life.

キーワード

質的分析 qualitative analysis

物語 story

読み reading

意味 meaning

---

\* 東京大学大学院教育学研究科

## I. はじめに

質的調査法というのは、従来の量的調査法と対比的に用いられることが多い研究方法である。量的調査法はデータを数量によって表現される形で収集し数学的・統計的手法を用いて分析する研究方法の総称と考えられる。それに対して、質的調査法とは、質的データを収集し非数学的な手法を用いて分析を行う研究方法の総称である。

本稿では、質的調査法の過程のなかでもいちばん厄介だと言われており、かつ、質的調査法の性格をもっともよく表していると考えられる質的データの分析について、簡潔にその概要を述べてみたい。もちろん質的分析の方法を身につけていくためには、自分で手を動かし頭を使って実際に作業することが必須である。ただその前に、質的分析が何をやっているのか、なぜそんなことを行わなければならないのかという点を理解しておくこともまた、実習の前提として重要であろう。なお、質的調査法全体に関するやや詳しい説明は、例えば伊藤・能智・田中<sup>1)</sup>などを参照していただきたい。

## II. 質的調査と〈物語〉

「方法」というのは、もともと「～への道」という意味であり、何らかの目的があつての方法である<sup>2)</sup>。では、質的研究法は何のために行われるのだろうか？様々な目的があり得ると思うが、とりわけ医療・看護・教育などに関心がある場合に重視されるのが、「対象となっている人びとの視点から現実を全体的に理解する」という目的であろう<sup>3)</sup>。これは、もともと文化人類学が異文化を理解しようとする時にとってきた態度であり、最近ではフェミニズムの立場に立つ研究者などがしばしば主張するところだが、特定の立場を越えて広く質的研究者に共有されているものでもある。本稿ではさしあたって、質的データの分析はそのような目的のもとで行われると考えておきたい。

ここで、「対象となっている人びとの視点から現実を全体的に理解する」というのはどういうことなのかという点に少し立ち止まっておきたい。まず「現実」という言葉なのだが、「現実」というのは多義的なので、その見方は研究者によって、あるいは理論的背景によって違って来るかもしれない<sup>4)</sup>。ここでは常識的に、「対象となっている人たちが生きている日常」といった意味でとっておけばよいかと思うのだが、他にも、研究が行われている現場という意味での「現実」もあるかと思う。そこでは、研究者もまた「現実」の一部として対象化されなければならないだろう。次に、「視点」

という言葉である。「立場」とか「場所」といった言葉で言い換えてもよいと思われるが、相手の「視点」に立つとはどういうことなのだろう。当然ながら、これは単に物理的に相手のいる場所に行ってそこから景色を眺めてみるというだけの話ではない。それ以上に、相手のもつものの考え方の枠組を読み取り、それを理解するのが重要になる。

ものの考え方の枠組は、〈物語〉的な構造をしているというようなことが、最近の心理学や人文科学ではときどき言われている<sup>5)</sup>。そうと言われてもピンとこないかもしれないので、ここではまず、〈物語〉とは何かもう一度考えてみるころから始めよう。McAdams<sup>6)</sup>の特徴づけを利用しながらその構造だけを取り出してみると、3つほど特徴があると考えられる。

- ① 具体的な概念が登場すること：一般的な意味での「物語」では、登場人物ということになるかと思うが、質的分析に利用できるように抽象度を上げて考えて、「具体的な概念」という言葉を使っておく。「具体的」というのは、単に頭で考えられただけの抽象的で空疎なものではないといったほどの意味である。
- ② 概念間につながりが生じること：私たちがよく接する「物語」では、登場人物が何らかの時間と場所において何らかの行為をするという形をとる。そうした具体的な行為は、単純には、「いつどこでだれが何をした」というような概念の連鎖を伴う。もっと複雑になれば、複数の概念の間で引かれ合ったり反発が生じたりして、それが個々の出来事を生み出すことになる。
- ③ 全体的なまとまりがあること：上で出てきた出来事は、複数出てくることが多いが、それがばらばらに存在するわけではなく、もう少し上位のレベルのまとまりをもっている。一般的な物語では、プロットと呼ばれる性質と関係している。起承転結とか、開始と展開と終結とか、そういう時間的な経過を含むまとまりが、物語を物語たらしめているのである。

人は、とりわけ、自分の人生や自分の生きている世界を理解するのに、こうした枠組みを利用している。

### Ⅲ. 〈物語〉をもつことの意味

自分についての〈物語〉をもつことは生きていく上で非常に大事なことだし、他者の〈物語〉を理解することもまた、その他者との共生、つまり、一緒に同じ世界を生

きていく上での1つの条件をなす。〈物語〉は人を支え人生を支える力をもつこともあれば、人を落ち込ませたり混乱させたりするように働く場合もあるわけだが、そうだとしたら、人が生きていくことを支えてくれるような〈物語〉が、その人にとってのよい〈物語〉と言えるかもしれない。そういう〈物語〉の力は、日常生活のいろいろな場面において観察されるが、例えば、宮崎駿の映画『千と千尋の神隠し』などにもそんな力が表現されているように思われる。

この映画にはハクと呼ばれる美少年が登場する。ハクは竜の化身だが、ほんとうのところ自分がどういふ竜なのか、本当の名前が何なのかがわかっていない。それで、湯婆ゆばと呼ばれる魔女に弟子入りしている。映画の終わり近くで主人公の千(千尋)が、もっと幼い頃にハクと出会ったときのことを思い出す場面がある。ハクは実は川の主で、千尋が子どもの頃にそこでおぼれかけて、川の主のハクが千尋を助けた、その川のことを千尋が思い出すのである。その場面で、竜の姿のハクに向かって、千はこう言う。

「その川はもうマンションになっちゃって、埋められちゃったんだって。でも今思い出したの。その川はね、コハク川。あなたの本当の名はコハク川。」

そう言った瞬間に、竜の身体からうろこがはがれ落ちて、人間の姿になったハクが現れる。千の一言でハクは自分の身に起こったことを理解し、昔の名前も思い出す。

どうして、「コハク川」という名前を与えられることで、ハクに変化が起こるのだろうか。最近、村瀬学の『宮崎駿の「深み」へ』<sup>7)</sup>を読みつつ、これはいわば、ハクに対して自分に関する〈物語〉が与えられたということだと気づかされた。〈物語〉というのは、上で述べたように概念と概念を結びつけたものであり、ものごとを新たな観点から結びつけ直す。ここでは、その結びつきの重要な結節点として、「コハク川」という名前がある。「コハク川」という名前は、単なる音の並びではない。そこには、その川が長い時間のなかでどのように変化してきたのかという歴史が折り込まれている。そこにはまた、周りの自然や人々との交流の歴史も含まれており、千尋とのやりとりもその一部になっているはずである。そういう事柄を結びつけた〈物語〉を意味してもつ名前を自分に重ね合わせるとき、ハクは自分が何者であり、自分がどのように生きていけばよいかということを理解するのだ。それは〈物語〉の力の現れとして、非常に鮮明な形で観客に訴えかけてくる。

このように、しばしば1つの名前の背後にある〈物語〉は、様々なものごとを結びつけ、結びつけることで何かをより深く理解させ、さらにそれが行動の指針、実践の

手がかりにもなる。私たちひとりひとは、そのような〈物語〉とともに生き、また生かされていると言っても過言ではない。質的研究とは、そういう〈物語〉を、対象者の言動を中心としたデータから読み取ったり、そこから発見をしたり、再構成していったりする営為というふうに考えることもできるだろう。

#### IV. 〈物語〉の素材としての概念

こうした〈物語〉において基礎的な構成の単位となっているのが個別的な概念である。これは人が「現実」を見るために使うもっとも基礎的な眼鏡のようなものであり、言語と緩やかな対応関係をもっている。古典的な考え方では、概念（およびそれに対応するような語の意味）は、それを構成する性質や成員によって定義できるとみなされてきた<sup>8)</sup>。例えば、「イヌ」という語に対応した概念は、「内包」と呼ばれる性質群（しっぽがある、わんわんと吠える、4つ足である、哺乳類である、etc.）と「外延」と呼ばれる成員群（柴犬、ダックスフンド、ブルドッグ、etc.）によって定義される。

ここで重要なのは、そのような概念の構成要素もまた概念だという点である。つまり、概念は概念間の関係として定義されるのである。さらに言えば、「イヌ」という概念は「オオカミ」とか「ネコ」とかという概念との対比のなかで、その領域を確定している。丸山<sup>9)</sup>によれば、語やそれに伴う概念は、体験世界に人間が一種の境界を入れたものに他ならない。そうだとしたら、その境界の外にある概念との関係のなかで、はじめてその概念が定義できると見ることもできる。いずれにせよ、〈物語〉の素材としての概念は、他の概念との関係のなかでその概念として明確化するということである。

加えて、概念の構成や拡がりとは絶対的・普遍的なものではなく相対的・恣意的なものだという点も記憶しておきたい。つまり、概念の関係には不動の根拠はなく、文化や社会のなかで、ときによっては個人のなかですら違ってくることになる<sup>9)</sup>。よく知られているように、言語文化が違えば概念の区切りもある程度違ってくる。例えば、「イヌ」と「タヌキ」は日本語では全く別の概念と考えられており、その間には明確な分節線があるわけだが、英語の場合にはそれほど明確ではない。英語ではタヌキのことを“Raccoon dog”と呼び、“dog”の下位分類の1つと考えられている。

こうした区分は、その人が生きている文化環境のなかで作りに上げられていくものだが、必ずしも日本文化とか欧米文化といった大きな文化だけが関わっているわけでは

ない。同じような価値観を共有する複数の人がいれば、そこに文化は存在する。例えば、地域社会や家族や年齢集団も、1つの文化を育てていると言ってよいだろうし、また、同じ病気や障害をもっている人たちは、共通した価値観や意味解釈の体系を作り上げているかもしれない<sup>10)</sup>。そういうローカルな文化、あるいはサブカルチャーにおいて作られるローカルな意味は、必ずしも辞書に載っているものばかりではない。先ほど、質的研究について、「対象となっている人びとの視点から現実を全体的に理解する」ことと関係していると述べたが、その基礎にあるのは、その人びとが現実を見るために作り上げている独自の概念を知ることでもある。そして、独自の概念を知ることとは、単に孤立した概念を知ることではなく、概念間のつながりを知ることにも他ならない。概念はすなわち、〈物語〉の素材でもあるし、また、〈物語〉それ自体とも言えるだろう。

## V. 〈物語〉の再構成としての質的分析

〈物語〉のこうした特徴を少し頭にとめてもらった上で、質的分析の過程について、少しだけ触れておきたい（詳細は、能智ら<sup>11)</sup>を参照のこと）。質的分析にも様々なタイプがあるのだが、最大公約数的に言えば図のような流れになる<sup>12)</sup>。ここには四角が

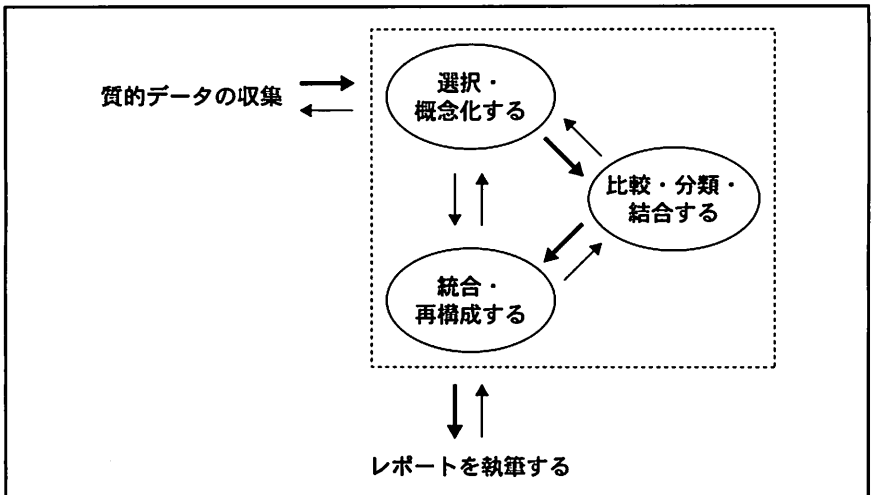


図 質的データ分析の概略（能智，2005）

2つ描かれているが、外側が広い意味での質的分析で、そこでは現場で見聞きしたことを文章化するのも、分析結果をもとにレポートを執筆するのも分析過程の一部とされる。それに対して、狭い意味でのデータ分析は内側の点線の四角になる。なお、やや細い矢印が上方向にも向けられているが、これは、この過程が絶えず往復のあるジグザグの過程であることを示している。

この分析プロセスにおいて分析者が最初に行うべき作業は、初期のリサーチクエスチョンを念頭におきつつデータの全体を読み込んでいくことである。それと並行して、必要な部分や重要と思われる部分を選択し、概念的に捉えていく（「選択・概念化する」）。質的分析の方法として最近よく使われているグラウンデッドセオリー法では、この段階で非常に細かくデータを検討し、なるべく文脈に影響を受けないよう心がけながら一行一行にラベルをつけていく<sup>13)</sup>。しかし、他の分析法においては、もっと自由な大きさの部分を取り出ししながら、文脈に則して意味を読み込んでいくかもしれない<sup>11)</sup>。次の段階では、部分につけられた概念や解釈を比較・分類するなどして、パターンを取り出したり関連を見出したりしていく（「比較・分類・結合する」）。また、そのパターンや関連性を確認したりするために、データの他の箇所を積極的に検討したりもする。最終的には、全体をまとめる軸やテーマを見出してリサーチクエスチョンをより精緻なものに変化させ、それに則してデータを整理し直す（「統合・再構成する」）。そしてその結果がレポート等にまとめられていくことになる。

この過程は、先に述べた〈物語〉の構成に大まかに対応しているように思われる。「①具体的な概念が登場する」は、最初の「選択・概念化する」というところに対応させることができる。「②概念間につながりが生じる」という点は、「比較・分類・結合する」というところに、「③全体的なまとまりがある」は、「統合・再構成する」というところと関連している。実証研究では〈物語〉という言葉は使わず、「モデル」とか「仮説」とか「理論」とかいった言い回しを用いるわけだが、言い回しはともかく、それが概念の構築物だという点は変わらない。むしろ、今述べたような〈物語〉の構造と質的分析過程の対応があくまで「大まかな」ものである。〈物語〉の素材である「概念」にしても、単に、データから選択されるだけではない。それは、むしろ、データを選び、結びつけ、統合していくということの結果として生み出されるものかもしれない。その「統合」の結果がさらに結びつけられ、統合されて〈物語〉という形で浮かび上がってくるとも言える。

## VI. 質的分析における「読み」

こうした分析のプロセスのなかで基礎的な作業となるのが「読み」である<sup>12)</sup>。「読み」は、言葉を中心とした質的データを相手にする限りは多かれ少なかれ必要となる。これは、データから独自の概念を取り出してくる場面にも、それを組み合わせる場面にも関係してくる。読みの作業は、直接与えられた素材の向こう側を志向し、また思考することである。例えば、

私はあなたが好きです

という文字列があったとして、これを読むというのはふつう、「どの文字がいちばん複雑か」を知ることでも、「この文字列には直線部分がいくつあるか」を知ることでもない。読むというのは、この直接与えられた刺激を手がかりにして、その向こう側にある意味、つまり、この言葉を発した人が言わんとすることを知ろうとする、そういう営為なのだと言えるだろう。

また、今「意味」と呼んだものは、より大きな構造と関連しているかもしれない。日常的な言語理解では1つ1つの言葉の意味を読み取ることでこと足りる場合もあるが、それでも本を読むときなどには、部分の意味だけではなく全体として筆者は何を伝えようとしているかが問われるだろう。また、その背景にある筆者の思想的な基盤や社会的な条件も問題になることがある。質的分析においても同様であって、個々のデータを超えたより基礎的であったり体系的であったりする何かが読み取られなければならない。それは例えば、その人の自己像の全体であったり、文化的な概念体系であったりする。何に照準を定めるかは、研究者によって違ってくるが、読みを深めていこうとする志向性は同じである。

意味を読み取るプロセスは、基本的には推論を伴っている。直接与えられているものの向こう側を探るわけなので、その際には与えられているものからの跳躍が必要になる。むろん、全く無根拠に跳躍することはできない。一般の書物の読みを考えてみると、そこで私たちが根拠として利用するのは、自分がこれまで習得してきた一般的な言語規則や常識的な知識である。日本語なら日本語の文法や語彙などを媒介に、読みの作業が進められる。そこにはさらに、こういう状況で使われたときにはこういう意味になるといった、いわゆる、語用論的な規則も含まれるだろう<sup>14)</sup>。例えば、「寒い」



という言葉は、「体感温度が低い」というのが辞書的な意味かもしれないが、状況によっては、「そのジョークはつまらない」という意味になるかもしれない。冬の寒い日に窓を開けた人に対して言えば、「窓を閉めろよ」という命令になることもある。

ここで注意しておかなければならないのは、研究者が知識としてもっているそういう規則を研究対象者がすべて共有しているとは限らないという点である。したがって研究者は、自分のもつ知識をただ単にデータに押しつけて解釈するわけにはいかないということになる。むしろ、研究者は全くの手がかりがないままデータに向かい合うことはむずかしい。結局、研究者は出発点として自分のもっている規則をまず足場にすることは避けられないだろう。そこから出発して、データとの対話のなかで自分の考える規則を修正しながら、少しずつ読みを進めていく作業が質的分析には欠かせない。読みとは、対象となるデータを解釈し、それによって自分の考え方の枠組を変化させ、変化した枠組で再びデータに向かい合い—といった循環のなかでなされるということのを忘れるべきではないだろう。このプロセスは、「解釈学的円環」と呼ばれることがある<sup>15)</sup>。

## VII. 〈物語〉の質の評価について

さて、こうした分析によって生み出され、あるいは発見された〈物語〉やモデルについて、どのようにしてその良さ、ないし質を確認していけばよいのだろうか。量的調査の評価と異なり、質的調査の評価はまだはっきりとした基準があるわけではない。質的調査の教科書を見ても、細かな部分ではまだ、様々な議論がある<sup>16)</sup>。それは、質的調査やその結果として記述された〈物語〉をどのように見るかという見方とも関わってくる。例えば、〈物語〉を現実にある対象者のあり方の写し取りとする考え方が一方にある。他方、〈物語〉は対象者のあり方に関する1つの解釈にすぎないとする考え方もあるだろう。後者の見方は、ポストモダンの思潮ともつながり、現在では賛同者が増えているように思われる。

筆者もまた、質的分析は研究対象に対する1つの読みであるとする立場に立つが、そこでは読みの良さが問題になってくる。私たちが小説などの文章を読むとき、その読みは人によっていくらか違ってくるのがふつうである。同様に質的研究の結果も、たとえ同じデータが与えられたとしても、分析者によって全く同じになるわけではない。しかしながら、だからと言って、どんな読みもOKだというようなことは言えな

いだろう。読みには正確な読みもあれば不正確な読みもある。また、深い読みもあれば浅い読みもある。質的分析の結果の評価は、不正確な読みを正確な読みから区別し、浅い読みを深い読みから区別することと関係している。

学会などで質的調査の結果を評価する仕事をしてみてつくづく感じるのは、その区別やはり、その結果レポートを読んだ際の直観から出発するということである。読みながら、「なるほど」と思ったり、「面白い」と感じたりする、その直観から評価が始まっていくのである。しかし、その直接的な感情だけでは、その評価の根拠を伝えることはむずかしい。そこでその感情の由来を自らに問い尋ねてみることになる。その由来として、大まかに「現実性reality」、「新奇性novelty」、「関与性relevance」という3つの方向が区別できるように思う<sup>17)</sup>。これは、Lofland & Lofland<sup>18)</sup>が提案している3つの視点を参考にしながら名づけたものである。以下で、それぞれの意味を簡単に紹介してみたい。

## VIII. 「現実性」という基準

「現実性」というのは、記述されている〈物語〉が「現実」と呼ばれるものにつきあたっていると感じられる程度のことである。いかに現実に対する多様な解釈を認める立場の人でも、結果の記述が、研究者だけの単なる思いつきと思われるときや、イデオロギーとか理念に導かれているようにみえるときには、評価を下げざるを得ないだろう。では、どのような基準でその「現実性」が判断されるのだろうか。現象学者の西<sup>19)</sup>によれば、人は日々膨大な情報を受け取りながらそれがほんとうらしいかどうかといった現実性の判断をしているのだが、その際、受け取る情報を“現実そのもの”と逐一对応づけているわけではない。ある物事の現実感の根拠は、1つには、その存在がありありとした実感を伴い、何度見てもそこにあると感じられること、つまり、与えられる情報の具体性や直接性である。2つめは、視覚だけではなく触覚など、別の感覚を通してでも感覚が得られること。これは、異なる時点で与えられる情報や異なるチャンネルからの情報の一貫性が現実感の根拠となっていることを意味している。3つめは、他人もまたその事象の存在を疑わないこと、言い換えれば、他者からの合意が現実の重要な構成要素になっているということである。

同じことは、質的研究の「現実性」を判断する際の基準についても言えるだろう。すなわち、重要なのはまず、研究対象について導き出された命題が具体的なデータに

よって例証でき、実際にレポートのなかでそのようなデータが引用されて、その命題の内容が読み手にありありと伝わることである。また、様々なデータの間に矛盾がなく、あったとしてもその矛盾を説明するような視点が確保されていることも必要になる。レポート内部においては、そこで与えられている情報に論理的な一貫性が感じられなければならない。それは、データとそこから結論づけられる命題との間など比較的狭い範囲の一貫性、そして、論文全体のリサーチクエスションと結論など、論文全体にわたる一貫性である。さらに、異なるチャンネルからの情報の一貫性としては、他の人からみて「確かにそうだ」という同意が得られるかどうかという点が関連している。トライアングレーション（三角測量法）、つまり、別の視点からみて同じような結論が導かれるかどうかという点や、メンバーチェック、研究対象とした人がその結論をみてその通りだと思うかどうかなどが、しばしば使われる基準である。

## IX. 「新奇性」という基準

「新奇性」とは、そのレポートのなかで語られている〈物語〉が、これまでの常識や先行研究などになかった知見を含んでいると感じられる程度を示している。例えば、そのテーマや対象がこれまではみられなかった新しい現象と関係している場合には、新奇性は高く感じられる。例えば、「ニート」という現象は比較的最近現れたものだが、そうした生活のなかにいる人々の体験の特徴を記述しその意味を明らかにしたとしたら、それは新奇性のある質的研究ということになる。また、これまであまり注目されてこなかった対象を研究した場合にも、新奇性は高くなるだろう。例えば特定の障害をもつ人々や特殊な状況にある人などの声を生き生きと呈示していくことは、質的研究ではしばしばとりあげられる。

しかし、新奇性はテーマの目新しさだけに関わるものではなく、それまでの理論や常識的なものの見方がその研究によって変革され、揺り動かされた場合にいつそう高まることになる。そうした変更は、大きく分けて次のような4つのパターンの考え方の転換と関係する。

- a) 構造化されていないとみえるなかに構造がある、あるいはその逆。
- b) 異質とみえる現象が実際には1つの要素からなる、あるいはその逆。
- c) 安定とみえるなかに変動がある、あるいはその逆。
- d) 類似とみえるなかに差異や反対の属性がある、あるいはその逆。

科学史上の著明な発見や理論的進歩の多くは、この4つのいずれかと関わっているようである<sup>20)</sup>。aは例えば、メンデレーエフによる元素の周期律表の発見に関係しているし、bについてはフランクリンが靨をあげて雷が摩擦によって起こる電気と同じものであると示した研究を思い起こさせる。cについては、例えばヴェーゲナーの大陸移動説と対応させることが可能だろう。dは、老年期のもの忘れなどとは違う病理症状としての認知症症状の定義などに関係していると思われる。質的研究では新たな仮説の生成が重視されるが、「新しい」という評価がなされるためには、こうした考え方の転換がどこかに含まれていることが必要であろう。

## X. 「関与性」という基準

最後に「関与性」だが、これは受け取り手がその研究を自分や自分の生きている世界に関係し、重要だとみなす程度を示している。人は様々なレベルで周囲に関心や欲求をさし向けながら生活しており、その関心や欲求との相関の高さに応じて、その対象に意味があるとか意味がないとかいった判断を下す。例えば、マッチの箱のデザインに関心がある人にとって、珍しいマッチの空き箱は非常に重要な意味をもつわけだが、関心のない人にとってはゴミにすぎないだろう。研究にしても、評価者の関心に響き合う度合いに応じてより意義のあるものと判断されることになる。ただし、研究を評価する場合には日常的な評価とは異なり、「私個人」にだけ関与していればそれで済むわけにはいかない。評価者は、意識的にせよ無意識的にせよ、「われわれ」としての関与性を判断しながら、その研究を評価することになる。

人が「われわれ」と感じる共同性は1つではなく、したがって、関与性のレベルも複数存在する。例えば、最近マスコミで問題として取り上げられているような社会問題に研究が直接関係している場合には、現代社会の成員としての「われわれ」にその研究が関与していると評価されるかもしれない。また、心理学の学的伝統のなかで問題となっていることとの結びつきがレポートのなかで示されていれば、心理学の世界に生きる「われわれ」としての意義が直感されることになるだろう。むろん心理学のなかでも様々な学派があり研究史が存在しており、より小さなそうした「われわれ」において重要性が認識されることもある。いずれにせよ、そうした「われわれ」との関与をそのレポートが読み手に伝えているかということもまた、研究の評価の一側面であることは間違いない。

## XI. 終わりに

本稿は、質的分析を〈物語〉の構成という点から見直し、語り直したものである。肩肘張ってむずかしく説明すると、ひどくたいへんな作業に思えるかもしれない。しかし〈物語〉の構成の基本は、人が日常的に行っている類似の作業からエッセンスを取り出したものとも言えるのではないだろうか。例えば、新しい環境に入ってそこになじもうとするときなどその典型だろう。最初は、そこにどのような暗黙のルールがあるのかはわからない。その場合人は、とりえず自分が知っているルールをもとに物事を理解し、その理解をもとに行動してみる。そしてその行動がどのような結果をもたらすかをみながら、自分の理解の妥当性を判定し、おかしいと思えば修正してその場のルールを自分のものにしようとする。そういう点では、質的なデータの分析というのは、新しい環境のなかでルールを学んでいく過程に似ているかもしれない。あるいは、心理臨床場面で、クライアントを理解しようとする場面を想定してもらってもよいだろう。

その日常的なプロセスは、なかなかすべて形式的には取り出しにくいのだが、近年はそうした日常的思考に関する認知心理学などの知見も増えてきている。そのような異なる分野の知見も利用しながら、より効率的な質的データの扱い方が今後ますます整理されていくことを期待したい。

### 引用文献

- 1) 伊藤哲司, 能智正博, 田中共子 (編): 動きながら識る・関わりながら考える—心理学における質的研究の実践, ナカニシヤ出版, 京都, 2005
- 2) 田中一彦: 主体と関係性の文化心理学序説, 学文社, 東京, 1996
- 3) Bogdan RC, Biklen SK: Qualitative research for education: An introduction to theories and methods (4th ed.), Allyn & Bacon, New York, 2003
- 4) McLeod J: The significance of narrative and storytelling in postpsychological counseling and psychotherapy, In “Healing plots: The narrative basis of psychotherapy” ed. Lieblich A, McAdams DP, Josselson R, 11-27, American Psychological Association, Washington, D. C, 2004
- 5) 榎本博明: 〈私〉の心理学的探求—物語としての自己の視点から, 有斐閣, 東京, 1999

- 6) McAdams DP : The stories we live by : Personal myths and the making of the self. Guilford, New York, 1993
- 7) 村瀬学 : 宮崎駿の「深み」へ, 平凡社新書, 東京, 2004
- 8) Hayakawa SI : Language in thought and action (4th ed.). Harcourt Brace Javanovich. New York, 1978
- 9) 丸山圭三郎 : 文化のフェティシズム, 勁草書房, 東京, 1984
- 10) Richardson L : The collective story : Postmodernism and the writing of sociology. Sociological Focus, 21 : 199-208, 1988
- 11) 能智正博, 難波淳子, 川野健治 : 質的データの分析技法, 動きながら識る・関わりながら考えるー心理学における質的研究の実践, (伊藤哲司, 能智正博, 田中共子編), 119-138, ナカニシヤ出版, 京都, 2005
- 12) 能智正博 : 質的データを読む, 動きながら識る・関わりながら考えるー心理学における質的研究の実践, (伊藤哲司, 能智正博, 田中共子編), 105-116, ナカニシヤ出版, 京都, 2005
- 13) 戈木クレイグヒル滋子 (編) : 質的研究方法ゼミナールーグラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ, 医学書院, 東京, 2005
- 14) 今井邦彦 : 語用論への招待, 大修館書店, 東京, 2001
- 15) Denzin NK : Interpretive interactionism. Sage. Thousand Oaks, 1989
- 16) Seale C : The quality of qualitative research. Sage. London, 1999
- 17) 能智正博 : 質的研究の質, 動きながら識る・関わりながら考えるー心理学における質的研究の実践, (伊藤哲司, 能智正博, 田中共子編), 155-166, ナカニシヤ出版, 京都, 2005
- 18) Lofland J, Lofland L : Analyzing social setting (3rd ed.). Wadsworth. Belmont, 1995
- 19) 西研 : 哲学的思考ーフッサール現象学の核心, ちくま学芸文庫, 東京, 2005
- 20) 小山慶太 : 科学史年表, 中公新書, 東京, 2003